

国立東京療養所にて

永遠の生命を嗣ぐには

——マルコ伝10・13～31——

1957年3月24日

小池辰雄

聖書の読み方 幼児のごとく 無善の善 十誠の根本精神 肝腎な一事 永遠の生命・自由
愛・栄光

【マルコ10・13～31】

13 イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14 イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯くのごとき者の国なり。15 まことに汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入るに能わず』16 かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

17 イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』18 イエス言ひ給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。19 誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』20 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』21 イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給う『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』22 この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

23 イエス見回して弟子たちに言いたもう『富ある者の神の国に入るは如何に難いかな』24 弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言ひ給う『子たちよ、神の国に入るは如何に難いかな、25 富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』26 弟子たち甚く驚きて互いに言う『さらば誰か救わるる事を得ん』27 イエス彼らに目を注めて言いたもう『人には能わねど、神には然らず、それ神は凡ての事をなし得るなり』28 ペテロ、イエスに對いて『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言ひ出でたれば、29 イエス言ひ給う『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、30 誰にても今、



今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。³¹されど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』

●聖書の読み方

皆さん、しばらくでした。今日は今年初めての東療集会ですね。集まってくる人々の着席の様子を拝見していると、前列の方へ始めから喜んで坐る人はやはり少ない。大勢になったので段々押し進められて、とうとう前列の方もいっぱいになりましたが、始めからどんな前の方へ坐るようにになりたいものです。

「私はまだ初めてだから、後の入口の所で遠慮していきましょう」

なんてことは思わないで、どうか遠慮なく前へ前へと入っていただきたい。遠慮して後の方へ坐る方がありますが、それはそもそも第一歩からして間違いですよ。遠慮なしに私の目の前、この辺まで来たってかまわないですよ(笑)。

さて皆さん、私はお説教をするのではない。皆さんと一緒に聖書の世界に入ろうとしているだけです。初めての方々に申し上げますが、聖書を学ぶことは一体どういうことか。普通、「聖書を学ぶ」というと、

「さて、聖書は何が書いてあるのだろうか?」

というわけで、すぐ頭で解ろうとかかります。その角度では5年たっても10年たっても、実は聖書は応えてくれない。およそものごとはそれに対する態度が大事ですが、聖書に対してはどうしたらいいか。

聖書は読む本ではない。聖書は聴く本であります。目で読むのだけれども、これは眼で聴くのです。「眼で聴く」ということ。即ち、私が今お話ししていれば皆さんはお聞きになるけれども、私は自分で話しているのではない。私はある角度から、この聖書を聴きながら、話をしています。私も聴いている。皆さんも聴いているんです。皆さんも、私も、聴きながらいま集会に臨んでいる。この「聴きながら」というのは何でしょうか。それは、

「神が今語りかけてくれるのを聴く。今、じかじかに神の言葉に聴く」

ことなのです

「二千年前にこう書かれてあった」

という文献を研究しているのではない。

「今このように聖書を通して神は我らに語りかけ給う。これを聴く」
ことです。そういった角度でもって聖書にぶつかる。これが聖書に対する態度なのです。

もうひとつ言いますと、聖書は「教え」ではない。聴くというとか何か教えを聴くことかと思いますが、これは教えを聴くのではない。「キリスト教」というから、「教」だから教えかと思うけれども、キリスト教というのは、キリストそのものであるのです。なるほどイ



エスは教えてもらっしやる。けれども、「教え」がいわゆる「教え」ではない。実は、キリストは教えるようなことは言っていない、キリストの言葉の奥は何かというと、彼は告白している。イエスは神の言を受けとつて、これを告白して、これを爆発させているんです。そういった神の言に自分も聴くという時には、ただ耳で聞いているだけではダメです。これは全身を投げかけてこれにぶつかっていかなくてはダメなんです。聖書は文字の奥から響きを発し、叫びを発し、呻きを発しています。これに聴かなくてはいいかん。

ですから、普通の世界でいろんな本を読んで、研究、観察などしているのとおおよそ違う。それは自分というものが主体で、その本は客体です。ところが、聖書は違う。この聖書が主人（主体）で、私たちはお客さん（客体）です。私たちはこの聖書という主人（主体）に、お客さん（客体）となつてぶつかつてゆく。

聖書はしかも、その文字が単なる文字でない、生ける文字であつて、この背後には驚くべき現実が躍動している。この驚くべき現実の中に、私たちは自分の身を投じていく。即ち、ドラマの中に、劇の中に――この聖書一卷は偉大な劇ですから、人間のあらゆる現実がその中に映し出されて、そこに天界から光がさして来て、闇の世界を光に変えるというドラマですから――このドラマの中に私たちが自分の身を投じて、闇であるところの私たちがこの光に包まれ進展させられる。

そういう角度でもつて聖書にぶつからなければ、聖書は5年読んでも10年読んでもダメです。そのかわり、その角度で皆さんがいま投身してくれば、一晩でもつてこの世界に完全に入れるのです！ どうかそういう角度でもつて身を投げかけ、心を注いでください。こわばらずにですよ。角度といつたつて何か身構えることではない。

旧約聖書の預言者たちや、新約の使徒たち、聖書を書かしめられた人たちはみな神さまにぶつかつて、そのような現実で血と涙をもつて、魂と全存在をもつて書かしめられ、告白せしめられている。書齋で思索して

「我思う、故に我在り」

なんてそんな世界ではない。聖書にぶつかつて、この現実の中に自分を投身し、そうして初めて開示されてくる。そうでなければ、絶対に聖書の七つの扉は開かれない。

そうしたらば、聖書はなるほど、「万巻の書の中の書」であることが皆さんに分かる。人間の思想ではないということが、はつきりつかめてくる。頭ではないですよ。頭で掴めるようなものは大したものではない。全存在がこれに溶かされるものなのです。あなた方の魂は安つぽくないのですから、全存在でなければ魂は本当に動かない。如何なる偉大な哲学も一人の人間の魂を本当に救い上げることができないのです。

聖書は人間の思想ではない。神の言は単なる観念ではない。これは生命の世界であるということがはつきりそこから言えるわけです。皆さんと今日は、マルコ伝10章の門を通つて聖書の世界に入ろうと思います。



● 幼児のごとく

マルコ伝10章13節から、

¹³ イエスの触り給わんことを望みて、人々^{おさなご}幼児らを連れ来りしに、弟子たち^{いまし}禁めたれば、¹⁴ イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯くのごとき者の国なり。¹⁵ まことに汝らに告ぐ、凡そ^{おさなご}幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入るに能わす』¹⁶ かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

皆さん、ここに

「触り給わんことを」

とあるでしょ。今、私は「聴く」と言いましたけれども、この「聴く」は、もうひとつ先に行きますと、この「触り給わん」ことです。イエスという人は生命が流れている人です。生命が流れているイエスに手を按^おかれる按手^{あんしゅ}です。小さい子供にイエスが手を按いてくださることを親たちが望んでいる。それはイエスから本当に、具体的に生命の祝福を得るためです。その意味においても既にこれは教えではなかった。ところが、イエスの弟子たちはこれを禁じようとしてました。イエスはこれを見て、憤^{いきどお}りて言いました。

「お前たちは何故そういうふうにはばむのか」

と。この「憤る」という字は強いギリシア語で、

「幼児らの私に来るを許せ、それを禁じたりしてはいかん」

と、イエスは言われる。いいですか、皆さん、

「私は一体キリスト教に入れるだろうか？ 私はこの聖書がわかるだろうか？」

などと心配は要らない。どうか、このイエスを見てください。イエスは、やって来た幼児をいましめようとする弟子たちを退けて、

「さあ、さあ、来なさい」

と言つて幼児を迎えた。

「神の国はかくの如き者の国である」

というのがその意^{こころ}です。キリストはあまり説明なさらない。幼児というものをただ見て、「かくの如き者の国である」という。どういうことでしょうかね。

幼児というのは、私たちが小さな子供たちを見てもわかるでしょ。分裂がないのです、魂に。私たちは大人に成れば成るほど、あれこれいろいろなことを思いわずらわして、分裂している。ところが、幼児は実に単純でありまして、魂が分裂していない。幼児のあのあどけなさとか、可愛らしさとか、そういうことではないのです、キリストが「かくの如き」と言つたのは。

「このような魂の分裂のない者、これが天国に入っていける」と言われた。



「悪魔」「ディアボロス」というのは、魂を分裂させるもの、人と神との間を分かつものです。文化人というのは、みんなある意味において分裂症です。常に左顧右眄して、ああだこうだとやっている。そういった思いわずらいというものが無い、分裂のない魂の国です、天国は。

「まことに汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず」

「神の国を受くる」、神の国を受けるといふ。身体で受けるのです、身体で。神の国に入つてゆくためには、幼児のように全存在をもつて受けていく。幼児という者は、本当にお母さんに信頼しているでしょ。そしてお母さんを見さえすれば、もうそれで安心してしまふ。そのようにですよ、私たちがそれを見さえすれば、それにぶつかりさえすれば、「あとはどうでもいい」というような具合に、魂が本当にある一つのことに對して全的に投ずるかどううか、ここに重大な「在り方」がある。神の国を幼児のように分裂なしに、全的に、全人的に受くる者でなければ、これに入ることができない。これは何かこちらから資格を持つていくのではない。全的に受くる者でなければ入ることができない。

「かくて幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり」

按手なされた。キリストの祝福というのはただ体裁ではない。キリストの生命が本当にその幼児に伝わっていくわけです。そういったキリストの存在から幼児の存在にじかじかに生命が流れていく。潔き熱き生命の流れです。それを幼児は全存在をもつて受けとる。こういったのが即ち、

「幼児の如くに受くる者でなければ」

ということですよ。では、幼児の如くに受くるというのは、どうして一体可能であるか。

●無善の善

17 イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪きて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』18 イエス言ひ給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。19 誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』

イエスが途に出で給うた時に、もちろん弟子たちもついて行ったのでしようが、一人走りきて——その人はキリストのことを聞いていましたから、その素晴らしい先生にひとつ道を聞こうと思ってやって来たわけです——「跪きて問う」とあるように、大いに敬意を表した。今この頃は、

「人の上に人なく、人の下に人なし」

というようなことで青年たちの態度がまことに傍若無人——この傍若無人とは傍若無神、



神の無いことからきているんですが――傍若無神なものだから、傍若無人式になって、しかもそれが大いに人格の自由であるかの如く思っているが、とんでもない間違いです。かつて自分の人格はそれで小さな情けないものになる。

その人はキリストに、

「善き師よ、永遠の生命を嗣ぐために、我は何を為したらいいか」

と。この青年は一所懸命です。「永遠の生命」とは、主としてヨハネ伝に著しい言葉ですが、マタイ伝やマルコ伝やルカ伝では、「天国」「神の国」です。天国、神の国、永遠の生命、これはみな同じことです。キリストは何のために来たか。

「時は満てり、汝ら悔い改めよ、天国は近づきたり」

あるいは、

「神の国は近づきたり」

「我、何を与えんが為に来たか。永遠の生命を与えんがために来た」

即ち、神の国をここに到来させるために、永遠の生命をその個人の中に与えるためにキリストは来られた。これを「福音」という。福音というのは何か教えるではない。そういった具体的なものです。具体的なものを与えるためにキリストは来られた。

ここで、

「善き師よ」

と青年が言ったものですから、キリストは「善き師よ」が重大問題でした。

「何故、われを善しと言うか。神ひとりの他に善き者なし」

普通は、イエスという方は立派な先生ですから、そのイエスを「善き師」といって何もわるいことはないわけですが、しかし、イエスは自分を善しとは考えていない。それでは、イエスは罪びとか、そうではない。イエスはまことに善というならば、善の善なる人、義の義なる人でありますが、彼は自分がどんなにいわゆる人の目からは善であろうとも、義であろうとも、その善を善とせず、義を義としていない。即ち、その善というものを、その義というものを私して^{わたくし}いない。これは神さまのものである。神さまからきているものであつて、私のものではないということです。

これが、皆さんが福音書を読んで、このイエスという人をつかまえる大事な鍵です。イエスは自分を全く無として、何者でもないとして、彼は自分を深く自覚しておられた。例えば、ヨハネ伝5章30節を「ヨハネ5・30」

「我自ら何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。」

「私は自分ではなに事もできない。ただ聞くままにすべての事を判断してやっている」と。

わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣わし給いし者の御意を

求むるに因る」(ヨハネ5・30)

キリストは、



「自分は何もできない。もし私がやっているならば、それは私を遣わし給いし父なる神さまの御意をただ求めて、それを体現しているだけ、それを告白しているだけ、体をもつて現象せしめられているだけだ」

と、こういうわけです。ヨハネ伝6章63節に、

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし。わが汝らに語りし言は霊なり、生命なり」(ヨハネ6・63)

「霊なり生命なり」というこの霊であり、生命はみなイエスには神から来ている。イエスは、霊も生命も彼自身が、「自分が生命である、自分が霊である」なんていつて、自分の側にこれを置いてはいない。これを全部、私していないんです。

同じ7章16節を見ますと、

「イエス答えて言い給う『わが教えはわが教えにあらず、我を遣わし給いし者の教えなり。人もし御意を行わんと欲せば、この教えの神よりか、我が己より語るかを知らん』」

わが己から語ったら、それはダメなんです。キリストは神から聴いて、御意を伝えている。イエスのなされた「主の祈り」を、皆さん、知っているでしょ。

「聖旨を成らせてください、天における如くに地においても」

と、主の祈りでキリストは教えておられる。クリスチャンはみなこれを暗記するように知っているけれども、空念仏ではしょうがない。

「汝の御意を成らせよ、貴神の聖旨が成るように」

というのがイエスの全存在そのものであった。もしイエスの全存在を一言で表わせというならば、私はためらわずにこの言葉をとりまします。イエスはどういう人であったか。

「貴神の意志をして成らしめよ」

という人であった。

「私をどうかお使いになって、神さま、あなたの意志が全的に成ってください」

というのがキリストです。幼児の如くに自分を神さまにゆだねて、そうして受けとっている世界です。

「信仰」という字は、「ビリーブ」(believe)といいますね。あの「ビリーブ」の「リーブ」(leave)というのは、「捨てる、任せる」という字で、「自分を任せてある」ことが「ビリーブ」なんです。即ち、キリストが自分をまかせる、完全に自分を明け渡している。そうして自分は無である。ところが、神さまは無限です。この無限なる神を受けとるんですから、これはキリストが無限になるのです。キリストの事実は、彼は神を100%に受けとっているから、いつも申している通り、

「0=100」

あるいは、



「0＝∞」(ゼロ・イコール・無限大)

でありまして、キリストは自分をゼロとしていますから、神さまの100、無限大というものが彼の中で実現する。御意が彼においてぐんぐん成っていく。あの驚くべき言葉が発せられていく。あの驚くべき行為が展開していく。福音書において、キリストの言っていること、為していることはケタ違いであります。

「まあ神の子だからそうなるのは仕方がない」

くらいにみんな読んでいるけれども、「神の子だから仕方がない」ではない。キリストは「神の子」を何をもって実証したか。神秘的に、神話的に「神の子である」のではない。彼は事実本当に、血の涙を流すほどの祈りをして、

「汝の御意を成らせよ」

という、人間の弱さをどん底で自分が背負いながら、完全に神の事態を実現せしめていたのがイエス・キリストです。だから、我らの

「弱きを思いやる」

ことができる人なんです。ヘブル書4章15節や5章2節に書いてある通りです。その弱さに徹していたキリストは、私たちの一切をどん底において荷にない、そこにおいて神が本当に彼において自現していたのです。キリストは、はじめから十字架を負っている神の現象体です。

花は太陽の光を完全に受けている。太陽の光が花において現象している。即ち、草花は太陽の光の現象体である。花を見て、そこにおいて太陽を見ている人は、本当に花の本質を見ている人です。

そのようにキリストは自分は何でもないと言いながら、

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ14・9)

と言っております。しかもキリストは、神の現象体でありながら、そのことを絶対に私しない。私したら、キリストはダメになる。

サタンというのは霊的なものを私した。霊的なものを私して、神に反逆している。これがサタン。サタンは最も霊的なやつです。だから、これはばかにならない。サタンは暗黒の霊、虚偽の霊、高慢の霊です。

けれども、キリストは光の霊を私しないで、本当にキリストは聖霊に満ちて、そして荒野に行つてサタンと一騎討ちをした。サタンと戦った時に、彼は自分の霊力でなんか絶対に戦われなかった。どこまでも神を立てていた。神を立てて、

「石ころをパンにする」

ような、そんな呪術まじわぎはキリストはなさらない。

「宮から落ちてみる、天使が救うだろう」

なんていう奇蹟を試すようなことはなさらない。キリストが霊力を私したら、それこそサ



タンの思うつぼです。けれども、キリストは終始、霊の事態を私しない。これが極めて大事なことです。

「汝の御意を！」

といつて全部を明け渡したところに、キリストを通してものすごい霊の御業が現われた。文字通りそうなんです。福音書を水を割って読んでいたらダメですよ。

「そんなことがあるだろうか？ 本当にそうだろうか？」

なんてことを、人間の頭で考えているうちは分裂であつて、ダメです。

このキリストの驚くべき現実の前に降参しなければ、自分が本当に全存在をもって降参するまでは、聖書は扉を開けてくれない。

「門を叩け、さらば開かれん」

というけれども、単なるノックくらいではダメですよ。

「全存在をもつて私たちが聖書にぶつかつて、体当たりして、そこでもつてぶつ倒れてみたら、その扉が開かれる。そうして開かれると、向こうから光がさしてきて、知らない間にこちらが立ち上がりしめられて中へと進んで行く」

というのがこの聖書に入る「入り方」のただ一つの道なのです。どんなに研究し、どんなに神学論文が書いても、ギリシア語ができ、ヘブライ語ができ、聖書知識がどんなにできましても、聖書はその人には七つの扉をもつて封じこめられている。その人が神さまに、キリストの前に降参するまではダメ。どんなに文化人が、どんなに頭のいい学生がいくら研究したつてダメ。聖書は開かない。これはハッキリ申し上げておきます。

今のキリスト教界が大体において頭のキリスト教になっています。マルチン・ルターの宗教改革を更に乗りこえて、この使徒たちが本当につかませられたところの世界に私たちは突入していかなければダメです。だから、私は「使徒的信仰」と言う。この使徒的な信仰の世界と同質的なところに入っていかなければダメだ、ということなのです。

「何ぞ我を善しとするか」

という、このキリストの気合が受けとれなければダメです。キリスト、神の子の本当の無私色のつかないところの透明な世界。この心の清きところには、神は100%に臨んでくる。私たちはもちろんこのキリストの100%にはなれない。なれないから、

「まあいい加減でよしとしましょう」

ではないですよ。現実には私たちが100%になれなくても、この100%的な魂の気合を、この魂の在り方を、どんなにそれが惨憺たるものでもいいから、これをやっていかなければ、この聖書の世界に入れない。いいですね。

●十誠の根本精神

そこで、何とキリストは言われたかというと、



19 誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立てるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』

というのは、モーセの十誡中の人倫の面を並べたわけです。旧約聖書をお読みになると、出エジプト記20章、申命記5章にモーセの十誡が書いてあります。即ち、

「3 汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず。

4 汝自己のために何の偶像をも彫むべからず。

7 汝の神エホバの名を妄に口にあぐべからず。

8 安息日を憶えてこれを聖潔すべし。

12 汝の父母を敬え。

13 汝殺すなかれ。

14 汝姦淫するなかれ。

15 汝盗むなかれ。

16 汝その隣人に対して虚妄の証拠をたつるなかれ。

17 汝その隣人の家を貪るなかれ」(出エジプト20・3～17)

というのがこの十誡です。ところが、この十誡というのは——ちよつと話がそれますが、大事なことから少し申し上げておきますが――

「何々せよ、何々すべからず」

というが、実は、

「私がお前の神であるから、わが顔の前に汝にとつては神々は無いね」

というのがヘブライ語原文の真意なのです。

「汝、おのがためにいかなる偶像をも彫まない」

「汝は父母を敬う」

「汝は殺すことなし」

「汝は姦淫することなし」

「汝は盗むことなし」

「汝は偽ることなし」

「汝はむさぼることなし」

といって、イスラエルの民に宣言、断言しているんです。神さまは、イスラエルの民を信じかけて、

「お前たちは、私が神だもの、そんなことはしない。大丈夫だね」というのが十誡の根本精神です。

そのように、神さまがイスラエルを信じ愛し、現実にも実力をもって裏付けながら、神はイスラエルにおっしゃっている。学校の先生が生徒に対して、

「君たちは良く勉強するねえ」



というと、怠けている連中は、

「こりや悪いな」

と思つて勉強し出します。ところが、

「勉強しろ」

なんていうと反対に、

「少し怠けてやれ」

と。そういうもんです。

「何々せよ、何々すべからず」

といういわゆる律法おきてが来たので、

「逆に罪を刺激した」

とパウロはロマ書7章で言っています。本当の律法というものはそういうものではなかった。神さまの断言、現実宣言であつた。だから、神さまが信じてくださっているのだから、神さまの信賴に感激して、

「もう自分なんかどうでもいい」

と言つて、神に自分の全身を投ずる。信に対するに信をもつて応える。愛に対するに愛をもつて応える。その愛とか、信とかいうものは、上から来たものが貫きかつ上つていくようなものです。ここに信仰の世界の秘訣があります。

それを本当に受けとつたのは、イエス・キリストだけです。イエス・キリストはこのモーセの十誡を、神さまの信愛を受けとつた。神さまの信愛——皆さんの中には「信愛病院」から来ている方々がありますが、いい名前ですね——この神さまの信愛を受けとつたんです。神さまの信愛を受けとつて、彼は知らない間にモーセの十誡なんか乗り超え、これを満たした。これがイエスの実存です。

「すべし、すべからず」なんていつたつて、私たちはどうていダメです。そうではなくて、その神の中に入つてこの意志の中に、貴神なんじの意志の中に自分を投じて、

「我が意志に非ず、貴神の意志を」

と言つて投じて、その意志の表現であるところの十誡を自然と生命をもつて、喜びをもつて満たしたのがイエスです。生命や歓喜をもつて満たしていないものは、みなウソですよ。それは本ものではない。本ものは私たちが本当にそこに同時に喜びと力とを感じるような世界です。力や喜びや、生命や、光や、愛が、澎湃ほうはいとして流れてくる世界が本当の世界なのです。そうでない限りは、みなこれは窒息する世界です。実は、律法の根本精神はいわゆる律法以前の福音であります。律法の奥には実は福音がかくされていたのに、その福音をとりそこなつたのが、イスラエルの悲劇なのです。しかし、ここではキリストはその角度からはおっしゃっていないのですが。



●肝腎な一事

19 誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立てるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」²⁰ 彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』

彼はもちろん外側から守ったのでした。ある程度、内側からといえるふしもあったでしょうが、要するにそれは外側のはなしで、とにかく一所懸命でした。一所懸命で実に立派な青年なんです。道徳的には優の成績の及第生です。パウロもそういう「律法の義」では立派な青年でした。しかしこの「義」が、道徳的な誇りが、キリストの義の前に、実は虚しきものであることを知ったのでした。パウロの信仰と行為の烈しい問題は、ガラテヤ書をよく読んで知ってください。

ここでイエスはその健気さを認めながら、深い一点を指摘してこの青年に迫りたもうた。
21 イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う

とあるわけです。この青年は本当に立派な愛すべき好い青年だから、「目をとめて愛しみて」という表現がいかにもその時の情景をよく表わしています。「愛しみて」は「アガパオー」という深い愛で、愛惜してやまぬ気持です。福音書というのは、そんなに多くの言葉を費やしていないだけ、こういう表現には実に味があります。福音書には形容詞がない。あるがままに告白している。文法的形容詞はあってもそれは形容詞ではないんです。

『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』²² この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

金持の息子ですね。イエスがこの青年の一番の急所をもって試されたのです。その青年が金持であることは、イエスにはちゃんと見えていますから。この青年が一番大事なものは何かというと、財産であった。キリストの語気は、

「それは結構、本当によかった。けれども残念ながら、まだお前には一つのこと欠けていたね」

というのです。「一つのこと欠けている」という言葉は、逆にいえば、

「一つのことがお前に必要だ。お前は一つのことを必要としているよ」となります。実はこの一つが即ち、

「九匁の功を一簣に欠く」(非常に高い築山を築くときに最後にたった簣一杯の土が足りないだけでも完成しない意から、長い間の努力も最後のほんのちよつとの手違いから失敗に終わってしまうことのたとえ)

であって、この「一つ」を満たさないことは、すべてを満たさないことになってしまうのです。イエスの要求は、

「行きて、汝の有てるものをことごとく売りて」



であつて、「少しは分けてやれ」ではない。「ことごとく売りて」です。ずいぶん極端ですね、キリストの言われることは。

「ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝^{たから}を天に得べし」

その人がもっている最も捨て難いものをすつかりそこに棄てろと。

「最も捨て難いものをそこに投じてしまえ」

というのがこのキリストの天国への道なんです。あの貧しい寡婦が、レプタ二枚を持っていた。それを献金する時に、一枚を残して一枚をさし出すことをしなかった。二枚とも、ことごとくこれを献金してしまった。その時にキリストは、

「この寡婦^{やもめ}はその乏しきなかより、すべての所有^{もちもの}、即ちおのが生命^{いのち}の料^{かて}をことごとく投げ入れた」

「この寡婦の魂は本ものである」

といつて褒められたところがマルコ伝12章1～44節にあります。

「その有^もてるものをことごとく売りて、貧しき者に施せ」

私は今、この青年となつてここを読み、キリストに出会つているとします。

「ああ、その青年はそうだったか、ダメだったか」

ではない。私がこの青年になつてこの場面に立つて、この青年と同じように、この言葉によつて――私は金持ではありませんが――憂いをもよおし悲しみつつ、やつぱり去つてキリストから逃げてしまう情けない男でしょう。

その人の有^もつている最も大事なものを、皆さんがもっている中でこれとは思っている一番大事なものをキリストは、

「惜しみなく捨てろ」

と言うのです。それはどういうことでしょうかね。

私は今、ドイツ語の巨大な聖書を持っています。去年の12月に見つけたもので、1729年版という今から約200年前の大きな聖書です。古本屋の店頭飾^{かざ}つてあつたから、これは飾りものかと始めちよつと思つたけれども、これは売るといふ。

「それではぜひ私に売つてくれ」

と言つて私は手に入れました。それ以来、私は日曜毎に集会で必ず右傍に開いてやつていくわけですが、これは私の持つている本の中で最も尊いものです。イエスはこの聖書を原始福音の戦^{いくさ}のご褒美に、また武器として下さつたと思いますから、これを捨てるとは言わないと思いますが、私がこれを骨董扱いにしたら、棄てろと言われるでしょう。要するに、私がこの大切な聖書を貴重品としてこれに妙にとらわれたら、私はダメになります。

あの青年も魂が財^{たから}というものの奴隷になつていたからダメだったのです。

「一番あなた方の大事なものを捨てろ」

という。例えば、学問のできる人があれば、その人に



「お前はその立派な知識を捨てろ」

とキリストは言う。健康を誇っている人があつたら、

「その健康を捨てろ」

と、何でもその人がこれだと思うものを

「いごとごとく捨てろ」

というのです。それで、例えば私は大いに張り切つてしまつて、その聖書をパツと捨てちやつて、それで天国に入れると思つたら間違ひです。キリストが捨てろと言われるのは、実は何か対象を、ものを捨てることではないんです。

この青年が何故この財産を捨てることができなかつたか。それはこの青年は、自我が捨てられていない。財を惜しむことは、実は財にとらわれている我を惜しんでいるのです。我というものが本当に捨てられているならば、時あつてか、その有るものは無きが如くに捨てることができる。本質的に有れども無きが如くあり得るのです。パウロがピリピ書4章12節で、

「我は卑賤いやしきにおる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うるこ

とにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。」(ピリピ

4・12)

と申す通りです。「我」がある限りには、たとえ捨ててみてもそれはダメなんです。また惜しくなる。そして神経衰弱にかかるくらいがおちです。

大事な問題は、このところでキリストが財宝を捨てろといった本当の意味は実は、

「汝は、己おのれ自身が本当に捨てられているかどうかね？」

ということなのです。そこで、私たちも自分が一番大事と思うものが何であろうとも、結局最後は、自己の問題なのです。「我」というものの問題です。我というものが捨てられているか。

さつき言いましたように、キリストは素晴らしい「善き先生」ですが、しかしその「善き」は、キリストは捨てて居られたのです。彼は即ち、

「何もできない、何も言えない」

という。自分を無に、完全に自分というものを捨てて居られる。キリストははじめから自分を捨てているから、遂に十字架において本当に己を捨てて、全人類の救いとなり給うたのです。

即ち、この「己を捨てること」は、実は私たちにはできない。いくら本を捨ててみたつて、己が捨てられない。ダメなんです。パウロも、

「ああ、われ悩める人なるかな」

と嘆きました。ここに如何なる教えも、如何なる文学も、芸術も、哲学も、科学も何もかも人間の魂を救うことができない。人間の営む文化的な一切のものは人間を救うことがで



きない。私たち自身を救うところのものが新しく来なければ、この我を捨てるということができない。人間が自ら救い得ない事実は、泥沼の我々が自分で自分の頭髪をつかんで引き上げても、泥沼から引き上げられない喜劇悲劇なのです。

●永遠の生命

「神さま、あなたの生命がこの私の胸の中に生きています」

ということを実に言えるようになるには、これはあるひとつの大事なものにぶつからねばならない。この我を捨てしめ、本当に神において生き、私たち人間に永遠の生命、天国を与えるために来られたイエス・キリストは、即ち天国体、永遠の生命体であるのです。

「この私を、この天国である私を、この永遠の生命である私をお前たちにやるよ」というのがキリストそのものなんです。

「求めよ、さらば与えられん」

とは何を求めるか。キリストを求めるのです。イエス・キリストを求めて失望することはない。私たちは何を求めて失望しましたが、キリストを求めて失望することはない。そうして、

「これを得れば何があってもいい」

というのが、このイエス・キリストという永遠の生命、天国なのです。だから、

「この天国に幼な子の如くに、全身を投じて来なさい」

という。ところが、その全身を投ずるのに、おきな幼児の如くにできないのが私たち大人の情けなさです。ワーズワースが、

“Child is father of the man”

「子供は大人の父である」

と言いましたが、その通りです。人の魂は全的な求めから外れてしまつて、この「我」というものが捨てられない。

その捨てられない我が、実は捨てられている場所があります。それこそキリストの十字架であります。イエス・キリストの十字架において、私たち一人びとりは捨てられているのです。

「私は、お前をすっかり、自己・自我に執するところのお前を、即ち罪というお前をここに棄ててしまった。汝、罪の塊かたまりは全部ここに捨てられて、私はお前のかわりにここで十字架にかかった。神さまの御意を直接に受けることのできないお前たちの苦しみは、私がみんな受けてしまつて、もうみんな解放した。私が引き受けたからお前たちは無罪放免だ」

と。これがキリストの贖罪あがなひということなんです。愛、アガペーとはこれです。私たち一人ひとりがこのキリストの贖罪の大愛に、霊の十字架に今ぶつかつて、



「ああ、私はもうすっかり問題なしの人間になった。私は解放されていた。これが自由というものだ」

と。この解放された自由というものは——今はどんなに文化人が「自由、自由」なんて言ったって——このキリストの十字架が与えてくれた釈放、解放、自由に比べては、太陽の光と蠟燭の光との差のようなものです。

いいですか。このイエス・キリストが、私たちを罪から、我執の我れから解放してください。相変わらずダメな私など見ていない。そんなものを見ていたって、いつまでたっても、100年たってもどうにもならん。そんなものはいいい。私なんか、もうさきほど申した人間小池の悩みは吹っ飛んでいる。私は自分を見れば、なやみの青年でありながら、贖われたる私はみ霊にあつて自由です。

だから、このキリストがみ霊をもつて内住してくださいって、

「私はお前の中にいる。お前は永遠の生命だよ！」

と言ってください。パウロの、

「我れキリストと偕ともに十字架につけられたり。我れ生く、されどもはや我に非

ず、キリストわがうちにありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

とのガラテヤ書2章20節の告白に対して、私たち一人ひとりが、

「パウロさん、本当にそうです！」

と叫べなければダメです。この叫びが爆発するまではクリスチャンでない。

それでも現実には私たちにはまだ罪や穢けがれが、いろいろなかさぶたがとれてはいません。しかし、そんなものはいいい。内側から新生命が、本当の永遠の生命が、霊の核が、柿の種のような霊核が、キリストの生命の種が私たちの中で成長し始めたのです。この事実、霊的現実を何ものもさまたげ得ません。この生命を如何せん。私がマイナス99であつても、このプラスーがマイナスをすつとばしていきます。

ここに私の希望があるのであって、私の希望が満々としているのは、このキリストが生き給うからです。このキリストが、「形成るまで」といって、私たちを待っている。そうして、地上ではその形は決して完成しない。まだ「弧」である。けれども、天界において私を「円」にして下さる。ブラウニングが詠った通りです。これが即ち恩恵の事実。だからそのようなキリストを受けとったならば、私たちには——希望というのは自分で希望するのではないですよ、普通の言葉は自分で希望するのだけれども、そんなのは希望ではない——キリストが確実に実現する希望を与えてくださって、

「大丈夫、そうなるよー！」

と言っておられる。絶対にこれは裏切らないんです。

新約聖書の「約」とは何か。このような素晴らしいことを約束しているのが「新約」という。その約束も空手形ではない。私たちの中に聖霊、み霊のキリストがきたり給うから、天界



に生きてあり給うところのキリストは、み霊における魂にきたり給うから、このみ霊に天国の確証があるのです。

「汝ら悔い改めよ、天国は近づきたり」

「悔い改めよ」とは、心を180度方向転換せよということです。

「いや実は、方向転換は私が十字架の枢軸でさせてやったんだ。これを受けとればいいんだよ、幼児の如くに」

と。そうしたらば、もう私たちは、

「ああ、そんなになつていましたか。過去において完了している十字架の恩寵をいま現に、現在完了として受けとるんですね」

と。過去完了を現在完了として受けとれば、やがて本当の未来完了になる。そのようにして進んで行くのが、このキリストの恩寵、神の国、永遠の生命というものです。だから、捨てることのできないただ「ひとつのこと」が、実は十字架に捨てられてあった。そのことは、ここではキリストはおつしやらない。みんな課題として残っている。最後に、キリストは十字架と復活の生命をもつて、福音を完全にその光の中に入れてしまった。ですから、

²³ イエス見回して弟子たちに言いたもう『富める者の神の国に入るは如何に難いかな』

なんとむずかしいことだろうと。

²⁴ 弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言い給う『子たちよ、神の国に入るは如何に難いかな、

非常に親しく言つておられる。

²⁵ 富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反つて易し』

この「駱駝」という言葉は、あるいは「大綱」という言葉かも知れません。アラミ語ではそういう言葉になっていますから。

²⁶ 弟子たち甚く驚きて互いに言う『さらば誰か救われる事を得ん』

人間の側からは、誰が救われることができるかと。その通りです。けれども、

²⁷ イエス彼らに目を注めて言いたもう『人には能わねど、神には然らず、それ神は凡ての事をなし得るなり』

神は凡ての事をなし得るなりと。全能の神です。キリストは、

「神は凡ての事をなし得るなり」

を完全に受けとっている人です。神の御意を受けて一切のことを成らしめてゆかれました。そのようにこの十字架・復活のキリストを受けとっていけば、私たちにおいても成つていく。神の全能は、私たち罪びとにおいてはこの十字架の回転軸によって全能としてはたらき給う。

パウロ、ヨハネは私たちの友だちです。大使徒が私たちの友だち。それはキリストを受



けていれば同質になるのですから。パウロ、ペテロ、ヨハネというのは、それは偉大な器でしょう。石の大小はあっても、同じ金剛石であります。同じ金剛石に我々がなる。クリスチャンが本当にキリストのみ霊を受けた金剛石のようなクリスチャンになるならば、世界はもつともつと素晴らしくなるはずですよ。ところが、我々がいい加減なクリスチャンだったら、浜の真砂まぎの如く数はふえても、何の役に立ちますか。

本当にキリストの生命が来ていないのでは、キリスト教界もこの原子力時代に耐えません。原子力というけれども、キリストのこの原始力——キリストという原始、はじめの力——を受けとつたらば、今の原子力なんかいくら爆発したって大丈夫、私たちは死にません。私たちの肉体は飛び散つたって、絶対に私たちの霊的存在は生きていきます。

「曠野からサフランの花が咲き出でる」

とイザヤが預言したように、荒廃した世界から新しき神の民は起こります。

皆さん、病氣なんか大丈夫、皆さんの内側にキリストの生命が芽生えつつあるではありませんか！ もしキリストを受けていなかったら、みんな同じ病人ですよ。けれども、イエス・キリストのこの生命が皆さんの中に来ていけば、皆さん、外側は少し変てこであつたって、そんなことは一向心配ない。もちろん、お医者さんの指示に従い、お薬も服用してください。けれども、生命はキリストですよ。神さまのこの生命は、これはあなたの方の中で一日一日と、今日は昨日よりも、明日は今日よりもあなたの方の中にキリストの永遠の生命が、天国体が、どンドン前進して大きくなっていく。これははつきり信じて受けとってゆかなければダメですよ。

「そうだろうか？」

ではダメ。それは分裂です。それでは「幼児おさないの如く」ではありません。幼児の如き心というものでなくては、天国には入れません。全的に受けとりなさいよ。祈りですよ。魂をそそぎだして、全的にキリストを迎え入れてください。

「私はあなたのものです！」

といってキリストの聖名を呼ぶ。しばしば祈りは叫びです。沈黙の叫びです。

「お父さま！ 主さま！」

の一語に全身を託するのです。必ず聴かれています。それが聴かれないと思うことが不信なんです。これはキリストがはつきり言っておられる。マルコ伝11章22～24節で。

そうしたらば、あなた方は本当に世界的なクリスチャンになる。

もうあなた方が一人、ただ一人の人が本当にキリストの原始力を受けとれば、アトラスのように地球を支えるような人になる。存在的に。ベッドの中で祈っていらつしやるその祈りが、全日本、全世界にわたっていく。キリストは、それ以下のものでないので、皆さん、この福音の世界はなんと素晴らしいものだろう。

魂は、いい加減なものでは満足しないんです。本ものにぶつかつたら、



「ああそうだ！」

といって、あなた方が叫びをあげるような、歓呼の声をあげるようなキリストのみ霊の世界ですよ。心の中では沈黙の雄叫びおたけをもつて祈っていてください。そうしてこのキリストを元のように受けとる。聖書の言葉はさつきから申し上げているように、これにつかまれ、これに聴き、その現実投じて、

「我が言は靈なり、生命なり」
こゝろば いのち

と言われたキリストの言葉の中から、その息吹が発してくるというように、あなた方が受けとり出したら、聖書はあるがままを叫びだしているのですから、水を割らずに、皆さんが読みかつ聴いて直ちにグウーツと生命がくる。

「ああ、『我が言は靈なり生命なり』、然り、アーメン！」

と。キリストは今もなお福音書におけると同様、皆さんに現実に力を与えます。復活・昇天したキリストは私たちに聖霊を与えます。その聖霊はかつて使徒たちが受けました。今もなお同じく私たちの中に一人ひとりに、キリストは100%に入ってこられます。

28 ペテロ、イエスに対して『我らは一切をすて汝に従いたり』と言い出で

たれば、29 イエス言い給う『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、

或は兄弟、あるいあるいは姉妹、或は父、或は母、

あるいは妻、

或は子、或は田畑をすつる者は、30 誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。

即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に

これはアラミ語によると「仕事と共に」です、

受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。31 されど多くの先な

る者は後に、後なる者は先になるべし』

普通の角度から見たら、ずいぶん危険思想みたいです。何もかもみな捨てろというのですから。

●自由―愛―栄光

神さまと私たちの関係は、横の関係を考えていたらダメですよ。皆さんが祈る時には、「神・キリスト・我」が垂直に――ちょうど人間は立っています――関係しています。この垂直な関係がぐつと立ってこなければダメです。キリストが別なところで言われたでしょ。

「なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思を尽くし、力を尽くして、主なる汝の

神を愛すべし」(マルコ12・30)

と。「尽くし、尽くし、尽くし」というのは、何か残っているのではない。

「全的に神を愛し、神に信頼せよ」

というのです。そうして、



「一切のものを捨てよ」

とは、一切はあれどもなきが如くして、神とキリストと我というものがずっと貫き、この十字架によって贖罪^{あがなわ}れて、キリストの生命がやってきますから、その生命は愛です！この神の愛の生命が来たらば、それはほとぼしって泉の如くに流れる。即ち、それはいま捨てたと思ったこのいろいろなものに対して、今度は逆に神の愛として、キリストの愛として、あなた方から流れ出で、人々にそそぎかかるのです。あなた方が今度はその人たちのために、本当に祈り、喜んで尽くすことになります。

クリスチャンの自由というものは、そのような愛をもっているところの自由です。自由即愛の事態です。捨てたと思ったものを逆に救い上げている。今までの兄弟愛とか何とかいつているよりも、はるかに白熱的なものすごい愛がそこに展開しているんです。その愛はキリストが人類を愛した愛なのです。人類を十把一絡^{ぱひとから}げに愛したのではない。一人ひとり、私たち個人個人、一人ひとりにのびきならない事態として愛してかかっているのがキリストの極みまでの愛です。これが聖霊の愛なのです。

そのような具合にしてこのキリストの烈しい言は、実は最も驚くべき、幅の広い、弾力性のある事態である。それを受けとらないで、

「捨てたらあとどうしましょうか？」

と、そんなことではない。捨てたと思ったら、正に

「百倍を受けぬはなし」

なのです。天国体とあなた方一人ひとりになると、百倍の天国体が現れてゆく。

「隣の人に、私の中のこの生命をどうにかして分けてあげたい」

という気持ちになります。

そうして、皆さんが本当に親切をもつて語り、愛をもつてコップ一杯の水をやるというのは、みなこれはキリストの愛が自然にほとぼしっているのです。「すべし、すべからず」の道德の世界ではない。キリストの生命がそこにほとぼしってくる歓喜の世界になるのです。そうすれば、その熱きキリストの愛、光がその人を通して隣の人に自然に移っていくようになる。これ即ち、本当の伝道というのです。本当の伝道は、生活をもつて己を与えていくのが本当の伝道です。すべてのクリスチャンは即ち伝道者であります。

そのようにして、天国は展開せざるを得ない。「すべし」ではない。「ざるを得ない」世界なのです。第二の自然体が展開していく。第二の自然、天の法則が展開していく。これが止むにやまれないところの福音の世界です。「十字架を負う」なんていう言葉があつたって、ひとつも苦しくとも何ともない。即ち、復活の生命がきているから、本当にその愛の十字架が負われていく。これはみな、神の栄光の現われです。神の栄光、キリストの栄光の現われです。ただもう聖名の讃美ですね、ハレルヤ！

『愛泉』誌第11号、1957年4月20日発行より転載

